

自傷行為の利得 — 障壁モデルに基づく自尊感情と身体的痛みの耐性の関係について

松 山 紗 千

【問題と目的】

自傷行為の中でも自殺を目的としない自傷行為(non-suicidal self-injury 以下NSSI)を扱う。Hooley & Franklin (2018)はNSSIの利得－障壁モデルを提案している。利得はNSSIによって得られる内的・外的利益のことを指しており、障壁とはNSSIの遂行を妨げる心理社会的要因を意味する。利得が障壁を上回った場合にNSSIが発生するが、逆に障壁が利得を上回る場合にはNSSIが抑制される。自己報告のバイアスの影響を受けにくい暗黙の認知の指標(Implicit Association Test 以下IAT)は自傷行為のように自分の本当の考えや意図を隠そうとする動機がある行動の評価に特に価値がある。本研究では、人々のNSSIに対する潜在的態度を測定し、利得－障壁モデルにおいてNSSIの促進・妨害要因とされている心理特性とNSSIへのアクセシビリティの関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

研究参加者は年齢平均24.15歳($SD=3.2$)の計48人(男性17名, 女性31名)であった。本学のソナシステムで募集を行った。研究参加者に研究趣旨説明を含めた研究の詳細を各自で熟読するよう求め、各自のPCから実験ファイルにアクセスしてもらった。全7ブロックのIAT課題に取り組んでもらい、自尊感情や抑うつといった周辺要因についての尺度に回答してもらった。

【結果と考察】

自己とNSSIの潜在的連合強度を意味するDスコアは、NSSIからの回避要因となる自尊感情の中でも特性自尊感情のみ関係があることが示され、特性自尊感情が上がるとNSSIと自己の連合強度が弱くなり、特性自尊感情が下がるとNSSIと自己の連合強度が強くなることが明らかになった。衝動性はNSSIに直接的影響のある根拠に乏しいとし制御変数として関与するといった仮説とのつながりが見られた。また、攻撃性、ネガティブな切迫性、抑うつと不安との関連は見られなかった。